

柴田 武 著

日 本 の 方 言



岩 波 新 書

307

柴田 武

1918年名古屋市に生まれる
1942年東京大学文学部言語学科卒業
専攻—言語学
現在—東京大学教授，文学博士
著書—「日本人の読み書き能力」(共著)
「生きている方言」
「ことばの社会学」
「言語学概論」
「言語地理学の方法」

日本の方言

岩波新書(青版) 307

1958年4月17日 第1刷発行 ©
1975年1月20日 第17刷発行



著 者 ^{しば}柴 ^た田 ^{たけし}武

東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
発 行 者 岩 波 雄 二 郎

東京都新宿区市谷加賀町 1-12
印 刷 者 北 島 義 俊

発 行 所 東京都千代田区 株式会社 岩 波 書 店
一ツ橋 2-5-5

落丁本・乱丁本はお取替いたします 大日本印刷・田中製本

はしがき

戦後、人前で話をしなければならぬ人がふえてきた。それも、きまりきったあいさつだけでなく、かなりこみいったことがらを伝えたり、話しあったりしなくてはならなくなった。そのために、自分のことばについても、また、人のことばについても、気にすることが多くなつたように思う。

わかりやすく伝えたり、じょうずに話したりするのはどうしたらいいか、ということが問題になっているが、それよりももっと底に横たわっている方言の問題について、つつこんで考えてみなくてはならないと思う。

方言は生まれついて獲得する、母なることばであるだけに、方言をすっかり引っこめることはきわめてむずかしい。多くの人は、よそゆきの場では共通語、くつろいだ場では方言と、ことばの二重生活をしている。そして、あまり方言を意識しすぎる人は、方言を出すまいと気をつけるあまり、話そのものをしなくなる。「方言コンプレックス」というべきものである。

これは、共通語はいいことば、方言は悪いことばという価値観がかなり根深く行きわたって

いるからである。しかし、悪いことばであろうが、なかりうが、方言なしで日常生活のくつろぎを得ることはできない。

聞くところによると、西ドイツ連邦のノルトライン・ヴェストファーレン国（ボン市やケッルン市はこの国に属する）では、昨年二月、文部省から、小学校の先生は方言が話せる者であること、「国語」の時間の一部分は方言文学に当てなければならぬことを指令した。ここでは、方言は悪いことばではない。方言で劣等感を感じるということも全然ない。

この方言コンプレックスをとりさるのにはどうしたらいいか。また、どういう人が共通語をよく身につけているか、それを左右する社会的条件は何か。これらの問題を、いくつかの調査による資料を使って述べた。

方言の分布や歴史については、課題に答えるのに必要な範囲にとどめた。全国的な分布図にしても、その成果はあと数年を必要とするし、歴史にしても、ある一つの方言内の連続的な変化を具体的にたどるのには過去の資料が乏しすぎる。いまの方言を記録し、今後、何年かおきに記録を続けることによって、将来、方言の変化とその法則を知ることには大いに期待されるところである。

この本で利用した材料の多くは、著者がここ十年、国立国語研究所の所員として、各地で調

はしがき

査したものから得ている。そのことを断るとともに、調査に際して受けた上長・先輩・同僚、さらに、調査の相手になってくれた各地の人々の激励と協力とに感謝したい。

昭和三十三年三月二十日

柴田 武

目次

I 方言とは……………一

1 方言といえば……………二

2 郷土・生活・宇宙観……………七

郷土のことば 地域社会の生活とことば 方言それぞれの宇宙観

3 方言と共通語……………二六

それぞれの体系をもっている A町方言とA町共通語

II 方言の分布……………三

1 お国はどちら……………四

2 方言の境界はどこ……………五

III 方言で生活できるか……………七

IV 方言コンプレックス…………… 八九

1 方言と劣等感…………… 九〇

2 東京にも東京方言がある…………… 九九

3 コンプレックスを生んだもの…………… 一〇〇

明治以来の標準語教育 標準語教育の鬼

4 「第二標準語論」…………… 一三三

V 方言から共通語へ…………… 一四一

1 共通語化のプロセス…………… 一四三

どういふ人から変るか どういふ場面から変るか どういふ構造面から変るか

2 共通語化を支配する条件…………… 一六六

言語形成期 遊び友だち 親の影響 祖父母の感化 言語形成期における教育

VI 方言は今後どうなるか…………… 一八五

I 方言とは

1 方言といえ

普通に「方言」といえば、「シンドイ」とか「バッテン」とか「メンコイ」とかいった、東京とちがうことばのことをいう。「あなたは少しも方言が出ませんね。」とか「これは方言でしゅうか。」とかいうことをよく聞くが、この「方言」というのも、東京とちがうことば、という意味である。そして、問題になるのは、「シンドイ」「バッテン」「メンコイ」のように、一つ一つのことば、すなわち単語である。『和歌山方言集』とか『福島県方言辞典』とかいう本には、こういう意味の単語が集まっている。

東京のことばは多少とも全国の人が知っている。だから、地方のことばを東京のことばと比べれば、ほかの土地の人にもわかってもらえるということがある。それに、東京のことばは日本語の手本になっている。この手本のことばと比べて、ちがうものを「方言」というわけだ。

方言学では、方言を「ことばの体系」と考える。だから、一つ一つの単語は、そういう体系のひとコマにしかすぎない。しかし、普通に単語が問題になるのは、単語がちがいを示す目印としてとりやすく、話題にしやすいからだと思う。

方言学で「方言」をことばの体系と考えるのはどういふわけか。話を単語に限ろう。話し手にとって、単語は一つ一つバラバラなものではない。アイウエオ順に並べたようなものではない。意味と語形の上で、たがいに関係をもった全体として、一つにまとまっているようなものと考えらるからである。だから、単語を一つ一つ切り離して見たのでは、真に理解することはできないわけである。

アシタの次はアサツテ、アサツテの次は何か。その、また次は何か。——岐阜県稲葉郡鵜沼^{イナバウヌマ}町三ツ池^{ミツイケ}では、アサツテの次はシアサツテ、その次はゴヤサツテという。わたしの質問に答えてくれた人は、「シアサツテの次はゴヤサツテ。」といって、笑った。そして、「ロクアサツテ、ヒチアサツテ、どんだけでも続けられるわけですか。」と、笑いながら、つけ加えた。この話し手にとって、シアサツテとゴヤサツテは、シは4、ゴは5という「語源意識」によって固く連合している。

明後日——明々後日——明々後日の翌日は、意味(事柄)それ自身がはつきりした関係をもっている。そして、それぞれを表わす単語があれば、それらの単語は、一つの体系を作っているという。しかし、これは、広い意味の「ことばの体系」と考えておきたい。狭い意味では、鵜沼町のように、それぞれの意味に対応する単語の形(音)相互の間にも密接な関係が見られる

場合をさして「ことばの体系」といいたい。

同じ岐阜県の郡上郡奥明方村^{グジヨオ オクミヨオガタ}二間手^{フタマテ}では、アサツテの次はサアサツテ、サアサツテの次はシアサツテである。この話し手にとって、サアはサン(3)のことであり、シは4のことである。こういう語源意識がこの二つの単語をたがいに結びつけている。

このように、鵜沼町では、

アシタ——アサツテ——シアサツテ——ゴヤサツテ

奥明方村では、

アシタ——アサツテ——サアサツテ——シアサツテ

のように、それぞれの体系を作っている。体系はこれで閉じているのではない。アシタは、前にさかのぼって、キヨオ、キヨオの前、その前、またその前……と、体系はのびている。たとえば、鵜沼町のゴヤサツテは、シアサツテやアサツテだけではない、鵜沼町方言のすべての単語と、あるいは近い、あるいは遠い関係をもつてつながっている。

鵜沼町の人が奥明方村へ行つて、この、日の呼び方がちがうことに気づいたでしょう。これは、鵜沼町のことばと奥明方村のことばとがちがう(ことがある)ことに気づいたわけで、この、ことばのちがいが方言のちがいなのである。方言学では、東京のことばとのちがいをだけを問題

I 方言とは

第 1 表

	明 後 日	明 々 後 日	明々後日の翌日
鶴 沼 町	アサッテ	シ ア サ ッ テ	ゴヤサッテ
奥 明 方 村	アサッテ	サ ア サ ッ テ	シアサッテ
関 東 甲 信 越	アサッテ	ヤノアサッテ	シアサッテ
東 京 共 通 語	アサッテ	シ ア サ ッ テ	ヤノアサッテ
東 京 方 言	アサッテ	ヤノアサッテ ・シアサッテ	—

にしない。東京のことばは、比較される多くのことばのうちの一つにしかすぎない。どことどこでもいい。二つの言語の間に地域差があれば、それぞれ、それを方言というのである。

ところが、普通は、東京のことばとちがうものを「方言」といつている。では、その、東京のことばというのは何であろうか。奥明方村の有識者が、自分の村のシアサッテは方言じゃないですか、と質問したら、これに何と答えるか。わたしが、東京のいわゆる「下町」生まれだったら、東京じゃ、シアサッテはアサッテの次の日のことで、その次のことは何とも言いませんよ、と答えるであろう。その有識者が、でも、東京じゃ、シアサッテの次はヤノアサッテじゃないですか、とさらに質問したら、ヤノアサッテはシアサッテと同じことですよ、と返事するであろう。

国語学者の大野晋氏は、一年ほど前まで、シアサッテとヤノアサッテは、アサッテの次の日をさす同義語だと考えておられ

た、という。大野氏は、東京の下町、江東区深川門前仲町の生まれである。大野氏だけではない。辞書でもそうになっているのがある。木村謹治『和独辞典』を見ると、

shiasatte(明々後日) überübermorgen

yano-asatte(明々後日) überübermorgen

のように、二つは同義語となっている。『最新コンサイス和英辞典』でも、shiasatte と yano-asatte に全く同じ訳がついている。

ところで、奥明方村の有識者はこの返事に満足しないと思う。この人にとっては、東京のことばは、アシタ——アサツテ——シアサツテ——ヤノアサツテのはずだからである。

関東甲信越の一带では、この、日の呼び方が、アシタ——アサツテ——ヤノアサツテ——シアサツテとなっている。東京の下町でも、古くはこうだったのであろう。これと、奥明方村の有識者にとっての東京ことばの体系とが混線して、大野氏や辞書編修者のように、

アシタ——アサツテ——ヤノアサツテ

シアサツテ

という体系ができたのではないかと思われる。

東京には、大野氏のように、アサツテ——ヤノアサツテ・シアサツテという体系をもつ「東

京ことば」と、奥明方村の有識者の考えているように、アサッテ——シアサッテ——ヤノアサッテという体系の「東京ことば」とがある。このように、東京には、二つの体系の言語があつて、人によつては、これを使い分けている。普通、大野氏の「東京ことば」を東京方言、もう一つの「東京ことば」を「標準語」とか「共通語」とか呼んでいる。

東京に二種類のことばがあるように、各地にもそれぞれ二種類のことばがある。一つは各地の方言、もう一つは、東京の「標準語」または「共通語」をまねた、各地共通語である。

村なり町なり、地域社会の言語生活を見ていると、知らない人に話をするときなど、よそゆきの場面では共通語を使つても、家族や親しい友だちと話す、くつろいだ場面では、土地の方言を使っている。このように、各人が、方言と共通語との二重生活をしているのが現状である。

2 郷土・生活・宇宙観

郷土のことば

郷土のことばはなつかしい。家族や親しい幼な友だちとくつろいでいる気持にさせ、郷土で

暮した日々を思い出させる。この気持は、郷土をもつ人なら、だれでも感じたことのあるものである。

民俗学者の瀬川清子氏は、この気持をこんなふうに書いている。

下車駅の近づいた婦人が籠を背にあてて垂れさがった荷縄を後手で捜しているのを誰かが握らせてやると、

「なんぼ探しても返事コしねえものしや」

という。私の聴覚はながいつんぽから蘇えたかのように、どんな問答のかけらでも諧謔でも諷刺でも快よい旋律になって胸を打ち全身にしみわたってたのしい。貧しい田舎人たちのユーモアに富んだ生活ぶりが、早く故郷を捨てた者にはたまらなくなつかしい。恵まれない、不幸の多い故郷の人たちがこんな風に言葉を交わしてあたためあっているのが羨しかった（十勝のメノコ」西尾実編『日本語さまざま』）。

瀬川氏は秋田県出身である。岩手方言のように、東京語とひどくちがうことばが郷土のことばである人には、この気持はいつそう強いものと思われる。

東京生まれの人が、岩手県の山奥へ行つて、思いがけずチャキチャキの東京弁を聞いたときには、これと同様な気持にさせられるにちがいない。

しかし、両者にはちがうところがある。瀬川氏は、日常、郷土のことばでなく、東京の共通語を使っておられるであろう。ところが、岩手の山奥で東京弁をなつかしがった東京人は、日常、郷土のことば、つまり東京ことばを使っているだろう。だから、同じ、ふるさとのことばをなつかしがる気持といっても、そこにちがいがあるだろうと思う。

この気持を理解するために、少し極端な場合をとりあげてみよう。

一昨年、わたしがベルギーのルヴェンにある国際方言学センターを訪ねたときである。このS・ポップ教授や助手の人たちと、おぼつかない英語やフランス語で話しあって、一時間もたったとき、背中のところ、

「コンニチワ。」

という日本語を耳にした。ふりかえると、名刺を手にして、

「ボク チョオセンノ リイデス。」

と、あいさつする青年がいた。

わたしたちは、たがいに、日本語で、たくさんのことを話した。こういう席で、二人だけが、二人だけの話題で、しかも、ほかの人にわからない言語で話しこむのは、きわめて失礼なことである。わたしは、このことをよく知っていた。しかし、それを思い出すことを忘れるほど、

わたしは話に夢中であつた。

あとで考えてみると、そのときの話の中味は何もない。リイ君は、このルヴェン大学で古代インド文学を勉強中だった。日本でだったら、話題がすぐ尽きるところである。それなのに、話にわたしが熱中したのは、話すことがあつたからではない。ただ、日本語を話したかっただけなのである。

これは外国でのことである。瀬川氏にとっては、これほどではなからう。しかし、気持はつながるものがあると思う。

通信教育の大学生O君が夏休みにスクーリングのために上京した。彼が江戸川区小岩^{コイワ}町の、ある店に立寄ると、小さいときから聞きなれたことばがふと耳にはいった。

キヨオワ ヤリコオ アツイネヤ。コオリデモ タベニ イカンカン。

四十前後と二十歳ぐらいの二人は、三十六、七度の暑さにたえかねて、こんな会話をしていた。全然知らない人であるが、いい知れぬ親密感を覚えて、思わず、O君は、

アンタラ クニ ドコデエ

といってしまった、というのである。

話を聞くと、愛媛県今治市^{イマバシ}の出身である。期待した通りであつた。周囲すべてが東京語の中